

「キンケシ」 または本物体験のこと

間 藤 侑

自分の意志で自分の好きなものを自由に買ってよいという親のお墨付きに、五才の彼は興奮している。しかし、百円玉五個で買えるものはなかなか見つからない。ゴムのエリマキトカゲも残念ながら六百円。期待が大きかっただけに、小さな絶望と怒りと悲しみがいきりまじったような彼の表情は、今にも泣き出しそうである。しかし、とにかく自分の責任で選ばなければならぬことと、決して大人の助けは得られないのだという状況だけは理解している様子だし、意地でも泣きつくまいという意志も感じられる。くずれそうになる気持を必死に支えて、今、彼は真剣である。しかし、遂に発見する。彼のささやかなコレクションの中にまだなかった三百円のキンケシ。やがて、二百円の水入りボンボンも見つかる。しっかりと握りしめていたさいふは空になる。

緊張から解放された彼は、一つ大きな溜息をつく。晴れやかな笑顔。彼は、この祭りの夜のことを決して忘れないだろう。ボンボンは翌日にはしほみ、キンケシは砂場で消えた。しかし、未練を残す気配もなかった。考えてみると彼は、まさに祭りそのものの中に在ったと言える。

そう言えば、本来「祭り」というものは、どんな文化にあっても、現実の中に形ある痕跡をとどめないことよって、その文化の一面をになう深い意味をもつものであった。カニズバーグの『クロードイア秘密』（児童文学）を思い出す。計画的な家出から帰宅するクロードイアには、家出の前と同じ生活が待っている。彼女の日常には、おそらく何の変化もないだろう。しかし、内的世界の中で、確実に子どもから青年へと変身は遂げられた。家出という祝祭

的行為の中で、彼女は、自らを変えうる本物の体験を積み重ねることができた。それは、彼女に自信と勇気を与え、再び現実の中へと心豊かに戻って行かせるのである。もしかすると五才の彼もまた、あの祭りの夜に、あの微妙なイリンクス（めまい）を同伴だった一つの本物体験をしたかもしれない。

私達はしばしば、保育における本物体験の重要性を説く。しかし、本物とは何だろうか。生きているカタツムリやザリガニやうさぎの飼育が、本物体験と言えるのだろうか。この評価はきわめて微妙である。母の会などが大いに張り切る園行事のお祭り大会はどんな体験を期待して企画されるのだろうか。少なくとも、あつと言う間に金を巻きあげられるほとんどインチキに近いゲームなどは絶対に登場しないだろう。五百円もあれば、ワタアメを買い、その上もつとさまざまな買い物やゲームも楽しめるように仕組まれているはずである。決して、子どもを絶望や怒りや悲しみにおとし入れることはないだろう。

う。それは、見事に「親」の論理によって支配されている。傷つく子など一人もいないのだ。もちろん、それが悪いというのではない。しかし、……

今の子どもよりずっと貧しかった私達の子どもの時代。やつと買えたメンコをあつと言う間にとられた口惜しさや悲しさ、だから勝つための必死の工夫、胸がどきどきする勝負の緊迫感、勝利のめくるめく思い、それは確かに本物の世界だった。しかし、もしかすると今の子ども達に同じ体験は望むべくもないかもしれない。とられてもまた買えばよいのだから。そのことの不幸を思う。

たかが遊びである。しかし、遊びだからこそ必死になれるのだとも言える。子ども達は今、どうやってめくるめく勝利の味を体験し、一瞬の勝負の緊迫感を知るのだろうか。もしかすると私達は、日常の論理、常識の論理、大人の論理、教師の論理という眼鏡によって、保育の中に、まだ多くの可能性の隠されていることを見落してはいないだろうか。